

ニセコと国際交流 ――とあるユースホステルの実践

ニセコ、北海道にいる人なら、一度は耳にしたことのある地名だろう。スキー・スノーボードをたしなむ人からすると、憧れの地と言えるかもしれない。ニセコは北海道の片田舎の町だが、戦前からスキーの盛んな地として知られ、今や開発が進み、スキー場周辺は一大リゾート地となっている。その地域には外国人が溢れ、欧米風の建物が並び建ち、異国情緒に満ちた独特の雰囲気を出している。

では、そんなニセコでは、やはり盛んに国際交流が行われているのだろうか。ニセコに来る外国人たちは、地元住民と触れ合い、ニセコや日本の文化を享受しているのだろうか。今回は、そんなニセコにおける国際交流の実態を探るため、ニセコに住みユースホステルを営む伊藤雅之さんにお話を伺った。伊藤さんの施設では、スキーシーズンを中心に多くの外国人を受け入れているという。本稿では、伊藤さんの取り組みを通して、ニセコにおける国際交流のあり方について考えてみたい。

現在ニセコでユースホステルを営む伊藤さんだが、最初からこれといってニセコに縁があったわけではない。出身は江別市であり、大学は札幌市、最初の就職先は東京である。まずはそんな伊藤さんがニセコに至るまでの経緯についてお聞きした。

伊藤さんのニセコ前史

伊藤さんは、北海道大学における学生時代、農学部林学科（現森



伊藤雅之さん

林科学科）で樹木の生態を研究す

る傍ら、体育会航空部に所属し、道内外各地を巡っていたという。「自分たち学生だけで、グライダーやらそれを飛ばす機材やらを飛ばすところに持って行って、そしてそこで組み立てて飛ばすみたいな活動をしていたんですよね。それがすごく楽しくて。…そういう活動にかなりどっぷり浸かっていましたね」

大学卒業後は大手商社に就職し、木材関連部門で働いた。東京

で2年働いたのち、かねてから希望していた海外外向が叶い、オーストラリアで4年、ニュージーランドで5年と、現地の植林会社の経理部門で仕事をした。

「植林会社の経理と、あとそれ以外は買い付けチップの商売とか。経営に深く関与していましたね」

長らく続いた海外での会社員生活だったが、やがて北海道への帰郷の思いを募らせることとなる。理由としては、会社の中で収



欧米風の街並み（ニセコ・比羅夫地区）

益に固執する風潮が高まり、理不尽な要求をされるようになったことに嫌気が差したからだという。また、同世代の知り合いに自営業を営む者が複数おり、会社の経理としての経験を積んでいたこともあり、気ままな自営業への夢を見出しもいた。

「ニュージージーランドで、友だちに自営業の人が多かったんですね。レストランをやっていたりパン屋をやっていたり。わりと自営業ってできるものなんだなあみたいな、そういう印象を受けたんですね。僕も、経理の他にも人事とか労務とか細かいこと色々やっていたんで、自分にも自営できるんじゃないかなあみたいな、そういう思いが芽生えてきたっていうのはあるんですね」

そしてついに、長らく働いた会社を辞め、帰国してニセコに住み、ユースホステル「カリンパニ・ニ

セコ藤山」（以下「カリンパニ」）を開いた。ニセコに行きついたのは、自身が趣味で親しんでいたスキーと、長らく培った外国人との交流の経験からであり、キャンプをして休暇を過ごすのが好きだったことから、宿泊施設を開こうと考えたのだという。

ユースホステル カリンパニ・ニセコ藤山

カリンパニの構想は、ニュージージーランドで触れたスキー場経営の形態に影響を受けたものだという。ニュージージーランドには、「クラブスキーフィールド」というクラブ員による自主運営のスキー場が数多くある。伊藤さんはクラブ員同士、あるいはクラブ員とゲストの間の、肩肘を張らないアットホームなその空間に魅力を感じ、自身もクラブ員となってスキ

ー場に携わり親しんだ。こうした経験から、様々な人が交流できるユースホステルという施設形態をとるに至ったという。カリンパニの建物は、廃校になった木造校舎を改築して利用しており、リゾートホテルにはない独特の暖か



廃校を利用したカリンパニの建物



な雰囲気醸し出されている。

カリンパニの宿泊客は、やはり旅行者がほとんどだという。冬場はスキーをしに訪れる外国人で予約が埋まる。反対に夏場は日本人が多く、家族連れやツーリングをするライダー、合宿に来る学生など、バラエティに富む。伊藤さんは、特に冬場は、旅行者にとつてニセコが慣れない土地であることを考慮し、親切で丁寧なサービス・設備を心がけているという。「車じゃないお客さんが、こういう周りに何も無いところに泊まるっていうことで、そうすると当然送迎とかは必要になるわけです。スキー場に送迎しますとか、駅とか近くのバス停に着いたら送迎しますとか、温泉ツアーに行きますとか、どうしても必要だったらコンビニにも行きますとか、そういうようなサービスはしています」

食事については、利用者に使えないように配慮しつつ、かつ日



車がない利用者のためのレンタサイクル



親切な説明書き

本の文化を知ってもらうため、あの程度の頻度で必ず日本食を提供するという。

「ウチに来る外国人は、日本食の奥深さみたいなものに驚いて、そしてすごいファンになりますね。刺身とか、みんな好きです。ビックリするぐらい。」

またカリンパニは、「ウーフ」

「WUOOF」登録している宿泊施設でもある。ウーフアアが多く訪れることから、カリンパニは多様な経験・考えを持つ者が交流する学びの場ともなっている。

「ウーフは、僕がニュージーランドにいる時にたまたま知ったんです。（日本人の）友だちが剣道の先生をしていたんですけど、その人がずっと農家に住んでいたんですよ。それで話を聞いたら、農家の手伝いしたらそこに住めるっていう仕組みがあるらしくて、へえ面白いねって話を

して。その時はそれぐらいで話が終わったんですけど、日本に帰ってきてたまたま泊まった古民家の宿がウーフホストをしていて、（そこには）ウーフアアもいて、それで話を聞いて、その辺からウーフに興味を持った感じですね。じゃあウチもウーフやってみようかなと思って」

ウーフ [WUOOF]

「お金のやり取りのない、人と人との交流」を指す。ウーフ登録している宿泊施設（ウーフホスト）は、ウーフ登録しているゲスト（ウーフアア）

「WUOOF」に対して無料で施設を提供し、ウーフアアはホストの営む主に農業などの1次産業に従事してホストを手伝うことで対価を払う、というものである。両者はオーガニックな生活を通して交流を図り、様々な人・考えに触れて自身を向上させることを目指す。

(WUOOF JAPAN ホームページより)



様々な活動を可能にする体育館施設

旅行者の利用が圧倒的な割合を占める中、一方でカリンパニは地域の人々の多目的スペースとしての側面も持つ。廃校を元にした施設のため、客室のほかホールやグラウンドを利用できることで、フリーマーケットやワークショップなど、様々な活動を可能にしている。

「瞑想合宿とかもやっていましたね。それで毎年春、ここを1ヶ月間完全に開放したりしていました」

伊藤さんの取組みにより、カリ
ンパニは多様な国際交流の場と
なっている。しかし、ニセコ全体
ではどうだろうか。そこにはカリ
ンパニとは対照的な現状がある。

ニセコにおける 国際交流の課題

現在ニセコは、比羅夫地区を中
心に急激にリゾート化が進んで
いる。その実態は、日本人による
ものではなく、ほとんど全てが外
国の企業によるものであり、いわ
ば外国人が開発し外国人旅行者
を誘致しているといった状況で
ある。伊藤さんはこうした状況に
危惧を示す。

「外資中心で開発が進んでいる
んですけども、当然それに伴って
経営者とか従業員の人が増え
ていくと思うんですね。じゃ
あ実際そういう人たちと僕らに

接触があるかという点、今の段階
ではあまりないですよ。だから、
更に施設が増えて人も増えてい
くと、そういった接触がない人た
ちと地元民との分断というか、そ
ういう形に進んでしまわないか
っていう心配はあります」



シンガポールの企業による開発

対して伊藤さんの営むカリ
ンパニは、スキー場周辺のリゾート
ホテルとは対照的であるといえ
る。かゆい所に手が届くサービ
スや、食事の趣向、ウーフ登録施設
であることなど、その溢れるホス
ピタリティは伊藤さんと旅行者

との親しい交流を前提としてい
る。カリンパニを利用する外国人
旅行者は、多くが楽しいスキーを
求めてニセコに来るが、きつと帰
るときには伊藤さんとの交流も
一つの大きな思い出になってい
るだろう。国際交流のあり方につ
いて、伊藤さんはこう考える。

「一言でいうと、日本人が主体で
外国人を受け入れるっていう形
が、国際交流が生まれやすいので
はないかと思います。例えばこの
エリアでもそういうのが全くな
いわけではない、農家で外国人
が働いているとかっていうのも
最近増えてきているんですよ。通
年でニセコにいる外国人が増え
てきているので、そういう人たち
が夏の仕事を探すと、それが農家
の手伝いになるっていう、そうい
う流れになると思うんですけど」
世界に誇る観光資源があるが
ゆえに、ニセコは国際化する地方



北海道の文化を知ってもらうための細かな仕掛け

の最先端をひた走り、小外国のよ
うなものができつつある。これは
経済的な規制の緩い地方ならで
はの現象といえるだろう。しかし、
開発により町の経済が潤う一方
で、懐かしいニセコの風景は失わ
れつつある。地元住民が外国人を
受け入れるのはもちろんだが、外
国人も地元住民を通してニセコ
の文化に親しみ、両者が協同して
美しいニセコを守っていくべき
ではないだろうか。そのためにも
ニセコ全体がカリンパニのよう
な暖かな国際交流の場になるこ
とを切に願うばかりである。